

西代から六甲台学舎へ

M⑪ 赤川 安徳

1. まえがき

私達機械工学科 11 回生は、昭和 36 年（1961）夏、工学部が西代から六甲台に移転する当時三年生であった。移転当事回生として、移転前後の思い出を中心に話題をまとめるようにとのことであったが、どういうわけか移転を控えての「ワクワク感」、移転・引越し時の「苦労」、西代学舎との「訣別祭の思い出」などが記憶から完全に欠落してしまっている。これは大変なことになったぞと、クラスメートに応援を求め思い出を募ったが、異口同音に「とくに、これといったインパクトのある思い出はないなあ」という。記憶に無いのは私だけではなかったようである。

このようなわけで、本稿では移転当時に限定せず、私の西代学舎との出会いから始まり、六甲台学舎での卒業にいたる神戸大学工学部激動の時期全体を通しての思い出をまとめさせていただくことにする。

2. 西代学舎との出会いから入学まで

2-1. 西代学舎との出会い

昭和 34 年（1959）1 月ごろ、受験願書提出についてはギリギリまで迷っていた。目指す理科 2 科目・社会 2 科目の大学と社会 1 科目でもよい神戸大学とどちらにするか？社会科の学習の遅れを挽回できず、神戸大学にすることにほぼ意を固め、高校のクラスメート二人とともに自転車で工学部へ偵察に出かけた。

そこは、国鉄（今の JR）新長田駅北側すぐ近くに位置する所にあり、塀の外から見る校舎は、古い木造建に太い煙突がによっきりと伸びた、まるで映画で見た戦前の兵舎のようであった。

2-2. これが大学の先生？

塀の周りを一周した後、校門には誰も居なかったので中に入った。古びた木造の校舎が点在しており、手入れの届かない庭には一面に背の低い草が生えていた。「おい！これが大学か……。やばくないか？」など、友人たちと校舎を見上げて大声で話していると、2 階の窓がガラリと開き、眼鏡をかけた先生らしき人が大声で怒鳴った。「こら！お前ら誰に断って入ってきたんや。ここが何するところか分かってんのか。どこの高校生や。はよ出てゆけ！」 私たちは一目散に校門から自転車で飛び出た。大学の先生というと、品の良い、学究肌と想像していたので、「もし、あれが先生だとしたら、えらいガラの悪い先生やな」と友人たちと苦笑しあった。

後で分かったことであるが、この人こそ機械工学科の大きな声で怒鳴ることで有名な名物教授であった。

2-3. 合格発表・入学

合格者発表は松野学舎運動場の掲示板、おそらく、松野学舎との初めての出会いだったと思うが、あまり、校舎に対する思いはなかった。それより、春の暖かい陽射しに、合格した嬉しさで一杯であった。例年 4/10 に行われる入学式は、皇太子成婚式と重なったため 1 日遅れの 4/11 に六甲台の本部講堂で行われ、式後、待ち伏せされていた高校剣道部の先輩に歓迎され、おだてられ入部することになった。(1 年半の教養課程の間、御影分校から六甲台本部最も北奥に位置する道場まで練習に通うことになる)

このあと、工学部の学生は、松野学舎に集合し、科別に集合写真を撮影したが、この時が機械工学科クラスメートとの初顔合わせであり、今も時々その写真を見ると感慨無量である。



3. 教養課程（御影分校）

教養課程の勉強は、高校の延長のような感じで退屈であった。そんな中、入学早々の 4 月安保阻止国民会議第 1 次統一行動にはじまり、11 月の第 8 次統一行動ではデモ隊約 2 万人余が国会構内に入るなど、そして、翌昭和 35 年（1960）私が二年生になって間もない 5 月には新安保条約強行採決により、分校内での自治会執行部リーダーのアジ演説は日ごとに激しいものとなった。6 月に、全学連主流派約 4000 人が国会に突入、警官隊と衝突し、東大生樺美智子さんが死亡するという痛ましい事件が起こった。彼女は、私にとっては母校高校の先輩でもあり、父上は神戸大学文学部の教授でもあった関係で、感傷に任せて三宮センター街をデモったことを昨日のように思い出す。

4. 機械工学科（西代時代）

4-1. 専門課程へ進級

この年の 9 月、専門課程に進級し、松野学舎で初顔合わせしたクラスメートと一年半ぶりに、西代学舎にて再会した。松野学舎のグラウンドで御影・姫路分校出身者によるソフトボール親善試合が行われた。姫路分校から来た体格の良い連中が多いのには驚かされた。

4-2. 課外生活

土地柄コンパをする場所には事欠くことはなかったので、私は進んで幹事役を買って出て、よく親善コンパを開いた。板宿の居酒屋の 2 階でのコンパでは、あまりはしゃぎすぎたため、店の親父さんに怒鳴り込まれたこともあった。国道をまたいで南側にはダンスの教習所があり、クラスメートも少なからず通っていたようである。これらのクラスメートに背を押され、神戸女学院大学に乗り込んでダンスパーティの開催を申し込み、須磨の藤田ガーデンでの開催にこぎつけた。ただ、当日は世話役のため、殆ど踊ることが出来なかった悔しい思い出が鮮烈に残っている。4 年生の追い出しコンパが須磨寺で開催された時のことである。先輩に飲まされ酔っ払って、気が付いたら翌朝上級生の下宿（西代の山手にある池田町辺り）に泊まっていたこともあった。ほろ苦く懐かしい思い出である。

4-3. 講義

分校時代と異なり、「これが大学工学部の授業だ」という実感が沸いた。大矢根先生による材料力学は、チェモシエンコ著の英書がテキストであった。このテキストにあるテーブル（図表）は、就職後の設計業務でもよく利用した。機械製図は、中石先生の講義がユニークであり、知らず知らずのうちに力がつき、後々の設計実務でも、他校出身者に負けないくらいの自信がついた。

冬季、暖房に石炭ストーブを使っていたが、授業の始まる早朝、なかなか火が点かず煙で燻ぶって苦勞したと、いつも早朝に登校したクラスメートが述懐している。

4-4. 企業工場実習

昭和36年(1961)、三年生の夏休みを利用して工場実習が行われた。仲が良かったクラスメートの誘いでダイハツ工業池田工場に決めたが、とくに自動車に興味があったわけではない。夜行性の生活に慣れた身には、早朝から1時間半余りかけて毎日通勤するのはきつかった。実習先は実験課で、ハイ・ゼット(初代モデル)のセンターピラーにかかる応力測定であった。未開通の名神高速道路(甲子園浜近傍)をテストコースとして利用して行った。ストレインゲージの貼り付け方、ひずみ計の扱い方、また、記録されたデータの処理方法など分からないことが多く苦勞させられた。実験を行っていたすぐ近くにある甲子園球場では、当時、高校野球の真っ最中であった。おりしも、兵庫県代表の報徳学園高校が、倉敷工業と対戦していた。指導員に頼んで、カーラジオで実況放送を聞かせてもらった。無得点のまま延長戦に入り、11回の表に倉敷工業が一挙6点を入れ誰もがこれで勝負あったと思った。ところが報徳がその裏に6点を返し、そして逆転して7x対6で勝利した。テスト場からも見える球場から大きなどよめきが聞こえたものである。

5. 機械工学科(六甲台時代)

5-1. 六甲台学舎へ移転

私達が企業実習している間に着々と西代から六甲台への移転作業が進められ、西代学舎との訣別祭にも参加できず、移転完了した新学舎へ例年より遅れて登校したのは10月中旬になってからであった。環境は一変し、拠点駅は国鉄新長田から阪急六甲へと変わった。

阪急六甲周辺は、近隣の高校生、本校の学生で賑わい、まさに学生の町であった。工学部の学生は、バス登山道を通らず、東の筋の高級住宅街を通り、進駐軍ハイツ跡の草むらの中を通り抜けて通学した。校舎は真新しく、立派なもので、講義室も居心地良かったが、周囲は殺伐として新長田になれた身には違和感を禁じえなかった。(現在の文学部・理学部・農学部などは勿論なく、だだっ広い山林であった)

5-2. 六甲台学舎での生活

ここでの最初のイベントが「実習報告会」であった。現在のように、パワーポイントのような便利なツールは無かったが、広い講義室の中でそれなりに有意義な報告会であったと記憶している。印象に残っているのは、運動場を兼ねたような空き地で、野球に興じたことである。お若かった坂口先生も、私達学生に混じって野球をされていたのが懐かしく思い出される。

5-3. 卒業研究

4年生になって、中石先生の第4講座で油圧関係の卒業研究を行うことになった。この

講座選択には、3年生の終わりの工場見学旅行で見聞した日立亀有の建設機械工場の影響が大きかったと、当時はそれほど意識に無かったが、今になって思っている。

テーマは、「バイパス型流量制御弁の試作研究」であった。当時、特装車両メーカーからの委託研究として挙げられていたそうである。エンジン直結の油圧ポンプから吐出される流量は、エンジンを吹かせると急激に増大する。この吐出量をそのまま消防車のブーム移動やフォークリフトトラックの荷を下げる時に送り込んだら危険である。この速度を一定に制御するために、余剰の吐出量をバイパスする目的で、安価でパイプライン内に軽便に取り付けられるものとしてバイパス型流量制御弁の実用化が望まれていた。弁体などは委託元のメーカーから試供を受け、ストップ、ポペットなど実験ファクターに關与する部品は新設間もない大学の機械工場で作してもらった。実験は、移転時に先輩たち(10回生)が苦勞して据付けてくれた実験設備に手作りの回路を加えて行った。油温制御のヒーター、クーラーが無いので温度管理には苦勞した。卒業論文は、先生から何度もつき返され、期限(3/7)が迫っている中、3/3に完成させ提出しようとしたが先生は不在。当日は国立大学1期校の入学試験が実施されており、先生は工学部の入試会場となっている市内の県立高校で試験監督をされていると聞き、この日を逃がすと提出期限までに間に合わないと試験会場まで出向き、先生を教室の外まで呼び出していただいた(試験官は二人)。すんなりとOKをもらえんと思っていたが、口角泡を飛ばさんばかりに大声で指摘を受け、もう一人の試験官が慌てて廊下に飛び出してきて先生をなだめられ事なきを得た。このような経緯を経て、論文が3/7に無事受理されたことをいまでもはっきり覚えている。

論文受理までは非常に厳しい先生の指導であったが、卒業が決まってからその後は、「非常に良く頑張った」とほめていただいた。卒業後に先生にお会いすることが度々あったが、「君のあの研究したデータは本当に役に立っているよ」と言ってくださり、そのたびに、入試会場の廊下での出来事を思い出したものである。

6. あとがき

本稿は、西代学舎との出会いから六甲台学舎での卒業にいたる私個人の思い出であるが、11回生クラスメートに思い出を募り、それらの思い出をヒントに私自身の思い出を掘り起こし、端的にまとめさせていただいたものである。

このようなことから、ある意味で、本稿は神戸大学工学部激動の時期を共に過ごした11回生の思い出でもある、とお読み頂ければ幸いである。

(終)

寄稿日：平成27年(2015年)2月5日 座02-04